



Title	“Interweaving of the Female Imaginary : The Poethics of H.D. and Luce Irigaray”
Author(s)	川野, 敦子
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40544
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 かわ の あつ こ
川 野 敦 子

博士の専攻分野の名称 博 士 (言語文化学)

学 位 記 番 号 第 1 3 3 8 8 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 9 年 8 月 22 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当
言語文化研究科 言語文化学専攻学 位 論 文 名 “Interweaving of the Female Imaginary: The Poethics of H.D.
and Luce Irigaray”論 文 審 査 委 員 (主査)
教 授 宮川 清司
(副査)
教 授 高岡 幸一 助教授 北村 卓 助教授 森 祐司

論 文 内 容 の 要 旨

「女性的想像界を織る：H.D. とリュス・イリガライの倫理的詩作」は、20世紀初頭の英米における文学潮流であるイマジズム並びに（アメリカン）モダニズムにおいて重要な位置を占める詩人 H.D. (=Hilda Doolittle) と、フレンチフェミニズムの旗手、性的差異の提唱者と称される Luce Irigaray のフェミニスト詩的制作者の両テキストのインター・テクスチュアリティ研究をまとめたものである。

本研究における趣旨は、H.D. とリュス・イリガライという、それぞれの時代的潮流・文化的文脈において極めて特異的位置を占める両フェミニスト詩作/思索者＝詩人であり哲学者であるという両者の詩的テクスチャーが共有するテーマティックな結節点、主にフロイト精神分析理論という男性知の枠組みを基軸として織りあわされてゆく有りようを追跡する作業であり、両テクスチャーの相互共鳴性・交錯性を呈示しながら、両テキスト間にテクスト的連続体を産出することにある。

その際に本研究においては、二種のアプローチを採用する。まず第一のアプローチとしては、イリガライの展開する論考を H.D. の詩作品に照射することにより、テキストの無意識を浮上させ、H.D. のプロト・フェミニスト的側面を明察可能なものにするという精神分析的アプリケーションであり、もう一方は、理論と虚構という二項対置をいわば失効させるような形で、イリガライのテキストをより文学的に H.D. のテキストと同様の詩的テキスト・詩的制作という実践行為として併行的に捉えることにより、その共同製作性・親和・相補性を確認しようとするものである。この二種のアプローチの混淆によって、イリガライの初期主要著作の外郭のみに論考設定した一部先行研究とは異なり、彼女の後期著作をも射程に含めた、よりトータルなインターテクスチュアル分析を目指すものである。

本研究に接続する先行研究について若干言及すると、本稿の立論に接続と思われるもの、特に本研究の立脚点と近いものとして、Dianne Chisholm のものがある。彼女はフェミニスト的修正主義という、H.D. とイリガライの共通項を指摘しつつ、フロイト精神分析理論に対する H.D. の先駆的洞察について考察しているものの、扱われるテキストの範囲が限られている点が本稿と大きく異なる。他の精神分析派フェミニスト並びにポスト構造主義的フェミニストによる批評と同様、H.D. の後期代表作『エジプトのヘレン』*Helen in Egypt* が考察対象として取り上げられる頻度

が高く、その際に、イリガライの初期の著作『検視鏡』*Speculum*『ひとつではない女性の性』*This Sex Which Is Not One*における論考箇所が分析ツールとして若干引用される程度に留まっている。故に両者のテキストを、その後期作品をも射程に収め、全般にわたってトータルに併行して考察したものは、恐らく未だないと思われる。

次に、両テキストにおいて通底する企図については、現行の言説・文化システムにおける男性的想像界の修正といわゆる表象不可能性・直接性・絶対的内在性の探索すなわち女性的想像界の創造による社会/文化的治癒行為、更に多元的な性的差異の実践による両性の共生の地平の開示というものである。両テキストの共有するスタンスについて、本論文においてはそれを倫理的詩作 poethics、敷衍すると ethical feminist poetic (*poétique*) practice というタームに集約する。つまり第一に(性的)差異の倫理として、他者の想像界抑圧機構の解明とその解除、両極性・位階性に代替する複数性・多元性による性的差異の再概念化・言説化、これら一連の作業により両性の共生を目指すという文化的フェミニストとしての倫理的立場が共有するスタンスとして挙げられる。両者とも伝統的な人間主義的主体性の危機という共通のモメントにあって、性的差異の問題という存在論的課題の重要性に改めて焦点をあてると同時に新たな視点を導入したという点で強固に結ばれている。さらに第二点目として女性として転移の実経験に裏打ちされた修正主義、存在論的差異による苦悩とは別種の、表象不可能性に起因する女性特有の苦悩の解明と、更にファロゴセントリズム批判におけるミソジニー検分から、女性的エコノミーの導入による女性性抑圧の救済に従事する立場が考えられる。第三点目としては、詩的制作行為である詩・精神分析というビジョナリーな透察的・呪術/預言的行為を通しての象徴界と非言説的構成における改革、特に原始言語による想像界変革のアプローチを共有している。特に、詩の持つ凝縮性・物質性・呪術性・治癒効果への焦点の設定は特筆に値する。第四点目として文学的精神分析派フェミニストとして精神分析的経験という終わり無き実践のトポスへの固執、精神分析的手法一特に虚構的な次元へと遡及するベクトルの共通性が挙げられる。以上四点を poethics というタームに託して論考の拠点とした。

また他に、両者とも常に揺れ動きの中に身を置くノマド的スタンス(男性知・女性知双方への関与、エグザイルとしての存在)を維持していた点も考察の手だてとした。両テキストが共有する重要な方策として六点に分類した。まず第一に詩的制作者としての幻視力 visionary power の駆使、或いは神秘主義の戦略、第二に修正主義の方策、第三に詐病的-ヒステリー的模倣の戦略、第四にフェミニズム的一時的分離主義、第五に保留の戦略、第六にバイセクシュアリティ的或いは本質論的戦略というものである。

更に両テキストが共有する認識論的ツールとしては、本稿においてはこれをドゥルーズ派フェミニストの一人、Rosi Bradidotti のいう political fiction=政治的虚構という概念に近いものと指定するのだが、文化の前史と母という審級、原始言語、更にファルスの代替としての介在者=天使・母・粘液・愛のイメージャリーが挙げられると考える。又、その他の両テキストに関する共通項としては、両テキストが共にガイネーシスの概念に動機づけられたエクリチュール・フェミニンのサンプル的存在であること、常に「他の」に向けて他者性の神秘性、神聖性への志向が見られること、女性独自の美の領域の建設に関して共通の方向性がみられること等が挙げられる。以上のテーマ上且つ方策上の共通項並びにテキスト性・イメージャリーの結節を以下の章立てにおいて考察・展開した。

各章の概要は、まず第一章「ファロゴセントリズムと修正主義的行為」においては、両テキストによるファロゴセントリズム批判とフェミニスト的修正作業についての大要を述べ、第二章「イマジズム・モダニズム・ポストモダニズム・各派フェミニズム」では両者の転移作動の思想的背景—イマジズム/モダニズム、ポスト構造主義における男性的想像界の解明とその修正について、更に錯綜するフェミニズム各派における彼女らの位置を指定するという試みを行った。第三章「フロイト精神分析理論体系」では、両テクスチャーの結节点的存在であり、両テキストにおいて父権の象徴界による抑圧・周縁化という状況から、男性的想像界からの転移解除へ、更にフェミニスト的修正主義へと向かうベクトルの起点として重要性を持つフロイト理論について考察した。第四章「ギリシャ思想・神話体系と他の思想体系」ではギリシャ神話・哲学をはじめ、西洋思想における各種伝統—とりわけ宮廷愛詩・ロマンティシズム・ネオプラトニズム等の思想体系の伝統に対する修正の有りようを考察した。そして最終章、第五章「社会契約における女性」では社会/文化システムとしての家父長制・異性愛制度における両者の分析と変革の過程を明示した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、20世紀初頭の英米における文学潮流であるイマジズムとモダニズムにおいて重要な位置を占める女性詩人 H.D. (=Hilda Doolittle) と現代フレンチフェミニズムの旗手 Luce Irigaray によるテキストのインター・テクスチュアリティ研究をまとめたものである。その際、本研究は、二種のアプローチを採用している。一つは、イリガライの展開する論考を H.D. の詩作品に適用することにより、H.D. のプロト・フェミニスト的側面を明らかにする方法であり、もう一方はイリガライの散文テキストを H.D. のテキストと同様の詩的テキスト・詩的製作の実践行為として併行的に捉えるアプローチである。

全体は5章で構成されている。第一章は両テキストによるファロゴセントリズム批判とフェミニスト的修正作業についての概要を述べたもので本論全体の基幹部を成している。即ち、ファロゴセントリックな言説体系に内在する女性性抑圧・女性性表象不可能性のメカニズムの解明、女性とそのシステム内に巻き込まれてゆく知的転移とその解除、更には、新しい表象体系の創造への可能性模索の軌跡などが両テキストに沿って分析されている。第二章では、両者の思想的背景 (H.D. にあってはイマジズム/モダニズム、イリガライにあってはポスト構造主義・ポストモダニズム) にみられる支配的言説が前提とする男性的想像界の解明とその修正について分析を行っている。即ち、イマジズム/モダニズムにおいては「客観的真理」や没個性、両性具有といった性差の問題を排除したファロゴセントリックな思想の枠組みについて、またポスト構造主義的場面においては主体の死・中性性・身体性等のテーマをめぐって女性性の再抑圧・女性主体の可能性阻止に繋がる性的差異抹消の問題を論じている。第三章は、両テクスチャーの結节点的存在であるフロイト精神分析理論をめぐる両者の葛藤的関与についての考察である。即ち、フロイト理論が客観的普遍的科学的仮面のもとに隠し持つ性的差異の無視、知的ミソジニー、男性的説明システムにより不可視・表象不可能を余儀なくされてきた女性の苦難などの問題を両テキストの中に辿りつつ、父権的象徴界による抑圧・周縁化という状況からフェミニスト的修正主義へと向かうベクトルを明らかにしている。現代のフェミニストたちによる精神分析理論批判の萌芽が、既に H.D. の中で芽生えていた事実をイリガライの主張を適用することによって明らかにした点は特に説得力に富む。第四章では、ギリシャ神話・哲学をはじめ西洋思想における各種伝統 (宮廷恋愛詩・ネオプラトニズム・ロマンティズム等) の概念システムが女性性抑圧の文化装置にほかならぬことを指摘している。その一方で、両フェミニストが母娘関係を具現している神話の発掘を通して新しい女性像創造の手だてとしつつ、女性本位の想像界に根ざす言説 (エクリチュール・フェミニン) を創り出す必要性を主張している点をも明らかにしている。そして第五章では、哲学や精神分析などのディスコースの場面における暗示的セクシズムに比して、より明示的な社会/文化システムにおけるセクシズムのイデオロギーの検分を両テキスト内に読み取ろうとしている。即ち、現行の社会/文化機構における性的差異への無関心、未だ支配的なモノセクシャルな想像界、家父長制・異性愛制度における女性の劣性としての位置などを明らかにする一方で、隠蔽され続けてきた女性同士、特に母と娘の深層構造を再考する必要性を確認している。つまり、このような性的差異の倫理・両性共存のエチカが新しい社会/文化機構再建の基軸となることの提唱を両テキストに見いだしているのである。

H.D. の後期の詩作品とイリガライの初期の著作の部分的比較のみに論考を設定したこれまでの先行研究とは大きく異なり、本論文のように両者のテキストを全般にわたってトータルに比較考察した研究は未だ現れておらず、この点における本研究の意義は決して小さいものではないと思われる。例えば、モダニズムとポスト・モダニズムの間に断絶のみを見るのではなく、ある種の連続性があることを指摘できたこと、H.D. がその橋渡しの役割を果たしているらしいことなどを明らかにした点は、このインター・テクスチュアリティ研究が生み出した成果のひとつに数えてよいだろう。

一方、この論文の欠点としては、インター・テクスチュアリティという方法論からしてある程度はやむを得ないものの、引用が多すぎる点、それも論証不十分なまま放置される引用も少なくない点、更には、両者のテキストの

比較が真の意味での“インター・テクスチュアリティ”をなさず、むしろ両テキストの並列に終わっている、との印象を与えている部分があることなどが挙げられる。5章にわたって展開される議論も、やや総花的の感がある。論点を絞ってそのぶんもっと深みのある議論にすることもできたであろう。更に、英文の表現に「むら」があることも気になる。即ち、極めて格調の高い文体を駆使する一方で、基本的な表現上、文法上の問題点が見られる点が惜しまれるのである。

しかしながら、総体的に見れば本論文は、上述のとおり、先行研究の欠陥を大きく補う力作であることは明らかである。特に、難解さで知られる H.D. の詩作品、イリガライのフェミニズム思想を良く咀嚼した上で実験的な論文形式を試み、ジャンルの境界を越えて新しい領域へ踏み込もうとする姿勢は高く評価できる。

以上の諸点から、本論文は、博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値のあるものと認められる。